

# アンドレ・ジッドの方法 V

—生命の美学『イザベル』をめぐって

一九一〇年十一月、ジッドは第三番日のレシ、『イザベル』を脱稿した。日記には、この作品に関する記述は、少ない。あまりにたやすく書かれたからかも知れない。脱稿の日、彼は、こう語る。

「昨夜、小説を書きあげる。——あまりにも楽々と書いたので、この中に、「書かねばならない」と思っていたすべてが、最後の方の頁にはいったかどうか心配になる。<sup>(1)</sup>」

1

あまりにも楽々と書けたという作品が、しかし、最も完璧な完成度を示している。G・ブレーによれば、「他の二つのレシ、『狭い門』と『背徳者』にはないある完璧に達し<sup>(2)</sup>」、また「ある安心感を与える<sup>(3)</sup>」ものである。にもかかわらず、「書かねばならない」と主題を言い落しているのではないかと、何が、作者を不安にさせるのだろうか。作品の副題「悲壮な幻想」とは何なのだろうか。それを探ってみようと思う。

陶山 嘯

一

読者は、作品の語る世界に、ごく自然にひきこまれる。それは、客観的な事実を多く語るようにみえるからだろう。また、探偵小説風な謎解きにひかれてゆくのかもしれない。いづれにしろ、まず、物語をありのままにみてみよう。

若き学徒ジェラル・ラカーズは、研究資料を探し、学識豊かなフロッシュ氏の館ラ・カルフルシュを訪ずれる。「人生については書物で知る以外、殆んど何も知っていなかった<sup>(4)</sup>」この二十五歳の青年は、「ラ・カルフルシュ、この神秘的な名<sup>(5)</sup>」と心でくりかえす。抹香臭いポッシュエの聖書より、この城館で出会うかもしれない人間とドラマに期待していたのだ。というのも、彼は、自分を小説家と思いこんでいる。そこで、フロッシュ氏夫妻、その義兄老サン・トレオール夫妻、その孫カジミールらに出会う。ディッケンズ風描写でえがかれ

る彼らは、何か神秘的な雰囲気をかもしだす。フロッシュ氏は、学識のある人だが、何かの理由で、約束された将来を捨て、この館に隠棲している。大貴族の面影をのこすサン・トレオール夫妻は、その大時代的な異様さをみせる。びっこの孫が、なぜ両親から離れここで暮らしていることも不可思議。彼に対する神父の教育方法も何かしら不自然。園丁御者のガルチァンは、片意地に客に心をひらかない。全てが神秘的である。

ジェラルルは、この神秘的な「外観の裏にある現実を発見しよう」<sup>(6)</sup>と思う。又「一つの身振りにしても、その心理的な歴史的な解釈をせず見過ごすまい」<sup>(7)</sup>と想う。神父のいう「夢想的になりがちな朦朧とした若者の精神」<sup>(8)</sup>そのまま、青年は夢ごちである。

滞在第三日目、しかし青年はあきてしまう。鐘の音で呼ばれる三度の食事、書齋での仕事、カジミール少年との散歩、そして夕食後の変わりばえのしないゲーム。ジェラルルは嘆く。

「雨の壁で、僕は、外部の世界から、あらゆる情熱や生命から遠く隔てられていた。殆んど人間らしいところのない、冷血で色褪せた、心臓の鼓動が止ったような(ラ・カルフルシュの)異様な人々に取り巻かれ、灰色の悪夢の中に閉じこめられていた。」<sup>(9)</sup>

心持よい夢想が、悪夢に変わり、第四日目、青年は出発をはやめる決心をする。だがその午後、カジミール少年から母親の小さな細密画

を見せられる。この女は、……

「房々した黒い捲毛で半ば蔽われたこめかみ、やつれて悲しげに夢みているような眼、心持ち開いて歎息でもしているかのような口、花の茎のようになよやかな頸筋のこの婦人は、この上もなくひとの心を掻き乱すような、それであってこの上もなく天使的な美しさを持っていた。」<sup>(10)</sup>

この瞬間、ジェラルルは「場所と時間の意識を失ない」<sup>(11)</sup>、細密画のプロフィールへの恋に落ちた。女性の名は、イザベル。彼は出発をとりやめる。

第五日目、青年の想像力はふくれあがる。

「小径を曲る度、彼女の白い着物が、さっと消えて行くような幻を描いた……木の葉の繁みを洩れる光の一つ一つが、彼女の眼差や憂鬱な微笑を偲ばせた。……自分が恋をしているように思いこみ、恋人になったことが嬉しく、いい気持で自分の声に耳を傾けていた。」<sup>(12)</sup>

しかし、想像力の増大は、ある危機を感じさせる。ジェラルルは、自己の内部で、自分で創りあげたイザベルと恋をする。多分この女は、彼の自己投射といえるだろう。心の内部に映る自己のプロフィールを、彼は追うようである。外部の世界は、もはや存在しない。場所と

時間の意識を失ったのだ。

「~~憂愁~~という言葉では、……不十分……いきなり、魂の奥から煤色の靄が立ち昇り、生命と欲望との間に忍びこんでくる。それは、鉛色の幕となって、私たちを世界の他の部から遮断してしま<sup>(13)</sup>う。」

青年は、外部の世界から遮断される。そのとき、生命のもつ力は、失なわれる。なぜなら鉱物質のメダルの肖像を、抱いているから。真実の像を抱こうとメダルを破ることも空しい。メダルに投映された自己をも破砕する。後は、狂気と死の危機をはらむ。

「そして（外の世界にある）熱・愛情・色彩・調和などは、……屈曲し、抽象的なものとなって、やっと私たちに届くのだ、つまり、私たちは、認識するが、もはや、感動させられないのだ。そして魂を孤立させるこの幕を引き裂こうとする必死の努力は、……私たちを……導くだろう、殺人、自殺、狂気に……」<sup>(14)</sup>

ジェラルドは、どうなったのだろうか。まず、「生命と欲望のあいだに、鉛色の幕がおり両者をへだてる。「生命」とは、自己の生命。それが躍動する世界は、自己の内部、内的世界だろう。「欲望」とは、その欲望のはたらきかける世界。自己の外部、外的世界だろう。すな

わち「世界の他の部分」。

そこでは、「熱、愛情、色彩、調和」が存在する。具象、客体の世界だ。しかしその世界と自己の間に、鉱物質の幕がおりる。そのため、具象は「曲折して」、現実ではデフォルメされ自己に届く。「魂は孤立化して」、「認識だけ」の行為、すなわち視ることだけとなる。「幕」をひきさけば、「自殺、狂気」、自己崩壊に導びかれる。

鉱物質の幕は、鏡を連想させる。青年は、想像された女を恋する。彼は、現実のイザベルについて何も知らない。想像力は肥大する。自己の内部で対話され、虚像が大きくなる。全てが、自己の内部で行なわれる。だから女性は、彼の創造、自己投映だろう。鏡にうつる彼のプロフィールを、ジェラルドは、求めるともいえる。そして、鏡にうつる像を視ることだけ、すなわち「認識」することだけにあきて、抱こうとすれば、冷めたい鉱物質のガラスに触れる。生命のぬくもりはない。鏡を破れば、その後には、さらに冷めたい空洞がひろがる。自己の投映は消え、失なわれる——死。

『ワルテルの手記』以来、『背徳者』、『狭い門』をへて、親しい鏡のテーマ、水鏡を覗くナルシスの主題が、ここでもみうけられる。ちなみに、城主の名は、ナルシス・ド・サン・トレオール。

第六日目、夜、現実のイザベルがあらわれる。青年は、前日、幾分不自然な偶然から、彼女の古い手紙を発見した。この出奔を請う恋文は、彼を現実にはひきもどさない。さらに非現実の世界へひきずりこむ。

夜、彼は、「簞笥へよじ登り、隣りの部屋を覗きこむ。」<sup>(16)</sup>イザベルは、「もっと地上的な人間化されたような美しさ」<sup>(16)</sup>をもっていた。現実が、いくぶん、あらわになるように思われる。しかし、そこでくりひろげられたことは、「芝居でも見物しているような」<sup>(17)</sup>光景だった。大時代的な服装のサント・レオール公爵夫人と娘イザベルは、ラシーヌそのままの悲劇を演じる。そして、「この二人の繰り人形は観られているとは知らないのだから、一体、誰のために悲劇を演じているのか」<sup>(18)</sup>と青年は想う。その光景は、前夜、彼のみた夢と変りない。夢では、イザベルの人形が、居間に坐っていた。城の人々は、その人形に戯れていた。唯一つ、エステルの役を演じているイザベルの裾と靴下の汚れが、現実を気付かせる。だがそれにも、ジェラルドは恋を燃えさせたてしまうのだ。

「(イザベルの)濡れて泥だらけのスカートの裾が、靴下に汚ない筋をつけていた……突然、このみすばらしいものが語る痛ましい物語が、ぼくの心の中で、老婦人のせりふもどきの声よりも、高く響いた……イザが家を出て行く時、彼女のあとを追おうと心に誓った。」<sup>(19)</sup>

青年が、真に、現実に戻されるのは、この一週間の滞在の後、翌春再びラ・カルフルシュを訪れた時まで、待たなければならぬ。翌春、フロッシュ氏夫妻の死を、カジミール少年から知らされる。

ジェラルドは、再び館を訪れる。そこで、くりひろげられていることは、城館とその住人の死の風景であった。サン・トレオール公爵も逝き、館の売却のため、庭園の木を切り倒させている。青年は、そのなかで、心持よい想像力を蘇えらせようとする。

「こうした死の姿と蘇った春との対照にも殆んど気づかぬほど……莊園は、(木が倒されたので)、前より一層広く、陽の光に向って開け放たれ、死も生も同じような陽の光を浴びて、金色に輝いていた。このとき、遠くから、空気を厳粛な死の響のみたす、斧の悲しい音が聞こえてき、その音は、ぼくの心の幸福な鼓動と秘かにリズムを合わせた」<sup>(20)</sup>

この荒廃のなかで、ジェラルドは、イザベルに再会、というよりはじめて語りかける。しかし、彼女の告白は、青年を幻滅させる。彼女は、恋人と出奔する日、その手紙を秘密の場所に置いた。その後、不安にかられ、忠実な園丁のガルチアンに、手紙を取りに来る男を追い払うように伝えた。忠実な彼は、恋人を殺した。裏切った後、男の死を知った後の自分を、こう彼女は説明する。

「……ただ一瞬の臆病が、私の長い夢を一撃で砕いてしまったとは、どうしても納得できませんでした。私は、その長い夢から覚めていませんでしたわ。そうですわ、私は、夢心地で、庭において行

きましたわ。一つ一つの物音、影をうかがいながら。そしてなお待っていました……いいえ、私は、もう待っていませんでしたわ、自分をだまそうと努めていたのです。自分がかわいそうなので、待っている女をまねていたので<sup>(21)</sup>」

イザベルも、そのとき、長い夢に生きていた。ジェラルドが、彼女への夢を生きたのと同じように。そして、同様、時間と空間の意識を失なったという。

「自分が誰なのか、どこにいるのか、何をしに来たのかも、私はわかりませんでした<sup>(22)</sup>」

物語は、まさしく、「悲壮な幻想」を語っていたかのようにみえる。ジェラルド、そして、イザベルの幻想。さらに、城館の貴族たちの幻想、すなわち、全てが終わった後も、ラシーヌ悲劇を演じていた人々の幻想。それに園丁ガルチャンの忠誠も幻想にもとづかれているようだ。閉ざされた世界で、各自が自己の投影に見入っていた。そして、城の崩壊と住人の死が、現実に、全てをひきもどしたとみえる。

## 二

ここで、はじめの間にもどろう。おおかたの評家は、言い落とされ

た主題を、各様にさぐる。大部の小説論を著わしたG・ブレイとP・ラフィューのばあいをみてみよう。

ジェルメーン・ブレイは、主題を現実への到達過程としてとらえている。変幻きわまりない現実との相互関係と、その戯れとして、とらえている。

一読して、作品は、ごく平凡な認識を読者に示すだけのようにみえる。夢が、現実に触れることで、詩情を失なう(dépoétiser)ことを示すと。ブレイは、それをこう言いかえる。「夢が、現実をみずばらしいものにして、現実をおおいかくしていること<sup>(23)</sup>」と。ジェラルドが、とらえようとすると、現実は、そのプロメテ的な側面をあらわし、変貌し、逃がれ去る。城の住人たち、とりわけイザベルが、いかに最初の姿を次々と変え、きえていったか。ジェラルドのはげしい好奇心がそこになければ、何も構築されない。ジッドは、その関係のうえで、作品を構築する。

G・ブレイによれば、作者の美学は、こう定義される。

「美的創造は、ここでは、芸術家の内的要求と、彼の観察する外的諸事実とのあいだで成立する瞬間的で相互依存的な均衡と定義される。この均衡は、持続しないし、他のものになるために、たえず、解体されることになる<sup>(24)</sup>」

したがって、イザベルというレシは、到達点のない、永遠の動きと

なる。作者が、人間関係の隠された意味に、深くとらわれる程、その形は、変わる。そこから作家が引出す作品も変わる。現実の変貌し、作家は、そこから解放され、離れてゆく。ジッドが言い落した主題とは、その《悲壮な幻想》作品と現実とのあいだで、芸術家の維持する関係のことであると、ブレイはいう。ひとつの空間論としては、ある説得性をもつだろう。

たいしてラ・フィューは、物語を時間の問題としてとらえる。

『イザベル』は、話者が、ジッドと詩人ジャムに語る話である。この導入から最後に物語の聞き手がいることが再び思い出されるまで、そのことを読者は忘れていく。それ程手際よく物語にひきこまれる。その間、読者は、ジェラルルの話の直接の証人であり、能動的共犯者である。最終ページまで、時間と場所を意識しない。読者ひとりのためにジェラルルが語っているように思う。ところが、彼が口をつぐんだとたん、物語は、時間の視野の中におかれ、呪縛は、とける。そして、現実にもえた物語の人生が、さらにロマネスクな創造の旅におきかえられてゆく。

「ジェラルルが、物語をおえたとき、夜は深まっていた。眠りにおちる前、ジャムが第四の悲歌を書いたのは、その夜であった」<sup>(25)</sup>

今ひとつの呪縛にとらわれるようだ。一見真実と創作が、ある結合した状態で、混然となり、そこでは現実と創造は、もはや区別できな

いように見える。しかし、ジッドの求めているものは、現実の作品における模倣ではない。ラフィューは、彼の芸術をこう定義する。

「ジッドの芸術は、真実らしい物語をつくることなく、ある《物語》が問題となっていることを読者に忘れ去らせることにある。読者は、作者と話者を忘れる。読者は、現在の瞬間の後に、導びかれ、過去における現在というある特殊な時間に置かれる。現実の現在は、物語が完結し、輪が閉じられるとき、再び、見出される。現在の瞬間から出発して、ある生成の始源にさかのぼって、この生成を追い、そして再び現在の瞬間にもどってくる」<sup>(26)</sup>

ラフィューは、このジッド的な失なわれし時を求める芸術を、作者は言い落したと不安になっていると言いたげである。彼は、その本質を《日記》の芸術と考えている。

### 三

一九一一年九月二十一日、J・M・ベルナル宛手紙で、ジッドは、こう語っている。『イザベル』脱稿の翌年である。

「この言葉《悲壮な幻想》は、……読者にジェラルルの幻滅以外の主題を考えさせなくしたのではないかと思う、平凡な現実が幻想にとつてかわったときのジェラルルの幻滅以外を。」

そのことが、第七章について、最初の計画にはなく、そのためあまり書かなかったかも知れない章で、はじめの六章は、結果として、第七章を準備する章となったとあなたに考えさせなくしたのかも知れない。……正面から直接イザベルを描くことで、ある小説家は、すばらしいロマンを書けただろう……彼女の生成を語り、教育と環境の責任を非難し、……旧家の精神的崩壊を描くことで。

しかし、私が書くこともくろんだものはそんなところにはないのだ。<sup>(27)</sup>

第六章まででよいと、ジッドは、はじめ思ったようだ。何かが、第七章を書かせた。だから、副題の△悲壮な幻想▽が、主題なのだ、と誰でも考えられる。その章で、ジェラルルの幻滅があり、イザベルの幻滅の思い出も語られる。しかし、作者は、それ以外の主題を示唆する。ということは、第六章まででも、第七章が書かれても、主題は、隠顕していたかも知れない。だから、ブレーのように、作品全体の中で、変貌する現実とラカーズ、あるいは、作者の内的要求の関係と、とらえようとする。たしかに、第六章までは、ジェラルル・ラカーズ青年の想像力肥大があるとしても、それを描くのは、「バルザックにふさわしい背景」<sup>(28)</sup>である。現実、常にそこにある。ラフィエユのように、時間のペースペクティヴがとらえれば、それも作品全体を現実からの出発と回帰という形で、第七章の幻滅を、必要としない。ただ、話が終ったこととジャムの悲歌があればよい。

この物語では、最初から平凡な現実が、いたるところ皮肉に語られる。到着時の馬車の凡様さから、イザベルの裾の泥まで。物語は、ナルシス的な夢の崩壊と同時に、ありのままの現実の否定の情熱に導びかれていくようにみえる。その現実、作者にとって、「子供が、からくりを見つけようとして壊してしまった玩具」<sup>(29)</sup>なのだ。だから、一見、レアリスム小説の否定だけにみえる前掲の手紙でいう、正面から直接イザベルを描くことの拒否は、実は、現実そのものの否定を意味しているように思える。これが、真の主題にみえる。

一九一〇年、七月、イザベル脱稿の四ヶ月前、彼は『コリドン』を書きつつあった。

「どうしてもこれは書かなくてはならないという気持。……『コリドン』<sup>(30)</sup>を書きつつある今日ほど、この気持を強く感じたことはない。」

ホモ・セクシュアリテ弁護論と同時に、『イザベル』は書かれている。その性向は、ありのままの現実では、反自然とされる。ジェラルルが語る現実、あるいは「自然」<sup>(31)</sup>がある。その自然を「反自然」<sup>(31)</sup>にみちびき崩壊させる操作が、種類のメカニズムにより行なわれる。ラ・カルフルシュの崩壊は、その「自然」の崩壊を象徴しているのではないだろうか。だから、ジェラルルの言葉にたくして、ジッドはこう語る。あやうく書かれなかったかもしれぬ第七章の中である。

「内に潜んだ一つの力が、ぼくを掻きたてていた。荒廢が、美しい風景に、一種残忍な調子を与えているのに、悦びを刺激されるとは、どんなにか生氣に溢れていたのにかがいない……」<sup>(32)</sup>

## 註

- 1 A. G.: Journal I (Pléiade) p. 323.
- 2 G. Brée: A. G. L'Insaissable Protée (Belles Lettres) p. 213.
- 3 Ibid., p. 213.
- 4 A. G.: Isabelle (Livre de Poche) p. 15.
- 5 Ibid., p. 17.
- 6 Ibid., p. 48.
- 7 Ibid., p. 49.
- 8 Ibid., p. 56.
- 9 Ibid., p. 72.
- 10 Ibid., p. 88.
- 11 Ibid., p. p. 88-89.
- 12 Ibid., p. 101.
- 13 Ibid., p. 104.
- 14 Ibid., p. p. 104-105.
- 15 Ibid., p. 141.
- 16 Ibid., p. 142.
- 17 Ibid., p. 147.
- 18 Ibid., p. 147.
- 19 Ibid., p. 147.
- 20 Ibid., p. 170.
- 21 Ibid., p. p. 182-183.
- 22 Ibid., p. 183.
- 23 G. Brée: A. G. p. 218.
- 24 Ibid., p. 218.
- 25 A. G.: Isabelle p. 190.
- 26 P. Laflie: A. G. romancier (Hachette) p. 64.
- 27 A. G.: Lettre à J.-M. Bernard, Oeuvre Complète d' A. G. VI (Gallimard), p. 470.
- 28 G. Brée: A. G. p. 215.
- 29 A. G. Isabelle p. 184.
- 30 A. G.: Journal I (Pléiade) p. 306.
- 31 陶山・マン・ン・シットの方法「II」「III」「VI」(城西大学人文研究第4号「第7号」)
- 32 A. G.: Isabelle p. 171.  
A. G. = André Gide

イザヘル引用文は、新庄嘉章先生訳を借用させていただきました。